COMMUNICATION NEWS UP

TOKAI UNIVERSITY EDUCATIONAL SUPPORT CENTER

発行/東海大学教育支援センター　発行者/内田晴久　編集/教育支援センター教育支援課
発行日/2012年11月26日　URL：http://www.esc.u-tokai.ac.jp/

第53号

学生の満足度向上のための視点

特集
2012年度東海大学新任教員
フォローアップ研修会 開催
P1～P3

新任教員フォローアップ研修会

■学長基調講演

好評企画
2012年度第1回教育支援センター
FD研修会 開催
P4～P6

■後輩に勧めたい大学とは
■学生の満足度向上のための視点
■質疑応答から

■INFORMATION
教育支援センターFD研修会
今後のラインアップ！

教育支援センターでは、2012年8月30日～31日に「2012年度東海大学新任教員フォローアップ研修会」を東海大学山中湖セミナーハウスで開催し、各校舎から新任教員（医学部を除く）合計24名が出席しました。

学長基調講演の様子

本研修は、4月2日に実施した「新任教員大学説明会」のフォローアップとして、新任教員が授業を担当して、いま困っていること等を意見交換できる場を提供しながら、担当科目の授業力向上を図り、また、基調講演やティーチングアワード受賞者によるモデル授業等を通じて、FDに関する実践的理解を参加者全員で共有することを目的としています。東海大学新任教員向け研修としては初めての試みとなった昨年度は、湘南校舎での数時間の研修でしたが、今年度は更に充実した研修とすべく宿泊研修として実施しました。

グループ懇談会の様子

学長基調講演

学長　髙野二郎

2012年度東海大学新任教員フォローアップ研修会　学長基調講演　要旨

髙野二郎 学長

みなさん、おはようございます。基調講演といってもそんなに大それたことを申し上げるつもりはありません。皆さんに大学で気持ちよく仕事をしてもらうためのお手伝いができればと思ってこういうことをはじめたわけです。春学期の授業が終わったところで、東海大学はなんて変な大学だと思った方もいらっしゃると思います。そういうことも含めてお話を聞かせていただき、我々の大学改革に役立てていきたいと思っています。

グローバル化社会と人材育成

さて、少し大学の話をさせていただこうと思いますが、ご承知のとおり、今、大学に求められているのは、グローバル化した社会で活躍する人材の育成であります。これは、各大学が共通して目標に掲げています。また、文部科学省は学生の質保証を求めています。不景気な時代に、親も学費を払っているのですからしっかりとした人材に育ててもらわなければ困るというのは当然のことでありますし、これからの複雑な社会を何とかしてもらうためには、社会を改革していく人材を育てていく必要があることは納得できるところであります。このような流れの中で、質保証の手段として、大学は第三者評価を受けて、目指したものが達成できているかをきちんと示しなさいといわれるようになりました。本学も大学基準協会から第三者評価を受けました。もちろん「適」評価をいただいていますが、7年毎に評価を受け、来年は中間評価を受けるということですから、本学もかなり厳しい状況にあることは確かであります。このようになった理由は申し上げるまでもなく大学が危機にあるということです。危機というのは色々な意味があるわけですが、大学が社会の期待に応えていないということが一つです。もう一つは、これも申し上げるまでもないことですが、高等教育の急激な拡張政策と少子化が大学の危機の根本にあります。 大学の急激な拡張政策は、日本だけに限ったことではありません。学生数は1960年から2000年までの40年間にイギリスでは16倍、フランスでは7倍、アメリカ・日本・ドイツでは4倍と世界中で増えています。そのため、高等教育に国の財政を相当投入しなければならないということが世界中で起こったわけです。それで大変大きな財政負担になっているにも拘わらず、大学は社会の期待に応えていないではないかという批判が噴出したのであります。かつては社会をリードする一部のエリートを養成すればよかったのですが、既に、1960年代から大学はそういう役割ではなくなったことは明らかであります。それでは問題はどこにあるのかというと、そのひとつは、大学の教職員にあるということになります。大学は社会の中で新しい時代に必要な存在になってきているのに、大学の教育、あるいはそれを担う大学の教職員の意識は変わったか、これがなかなか変わらないというところに大きな問題があると思います。

教員の責務と組織的取り組み

先生方は若いうちから研究の訓練は受けてこられましたが、人材育成や教育に対してはどれほどの訓練を受けてこられたでしょうか。もちろん、そういう訓練や勉強をされた方もたくさんいらっしゃることは承知していますが、ここの部分が本学だけではなく世界中の大学で欠けていると思います。それでは大学はこれから何をしなければならないのかということでありますが、ドナルド・ケネディの『大学の責務』という本には、「学生たちに対する責任を果たすことが大学の使命である」と書かれています。我々にとっては学生に対する責務をきちっと果たすことが最も重要であるということです。 学生に対する責務とは、社会で活躍できる人材に育てるということであります。社会で活躍できる人材は、昔のように専門的な知識を持っていればいいのではなく、専門と同時に異分野を理解し、幅広く色々なことを知って対応する必要があります。いわゆる「教養」が必要だということです。その国の文化を持つ教養人でなければ身に付けた専門も将来生きることはなく、異文化や外国人との交流もできないというのは当然のことであります。創立者の松前重義が掲げた建学の理念や建学の精神をお読みいただければお分かりのとおり、松前重義がやってきた教育の根底にある、文理融合、教養教育の徹底、異文化理解が重要ということなのです。本学ではそれを設立当初から大変強調してきました。ただ、これからは“予定調和”では駄目だと第三者評価でも徹底的に言われていますので、最近のカリキュラム改訂は、それらをいかに今の教育に反映させるかということを中心に行ってきました。カリキュラムの理念を十分にお読みいただき、それを実行することは非常に重要なことであります。加えて今は、学部学科で育成する人材像を明らかにしていますので、それに対して組織的に取り組んでいただくのが大変重要だと思います。専門分野を学生に話せばそれで役割は終わりというのがこれまでの学部教育でありました。しかし今は、全体の中のどの部分を占めているのかということを学部学科の中で共通に認識することが必要であろうと思います。常に学部学科の中で先生方がご自分の役割を明確にして、全体として人材を育成するというご努力をお願いしたいと思います。私は学部長の先生方に

主なプログラム

◆学長基調講演
髙野二郎 学長

◆ＦＤに関して（シラバスの活かし方）
押野谷康雄 教育支援センター次長

◆今の大学生のメンタルヘルス～価値観、人生観、学習意欲～
芳川玲子 文学部心理・社会学科教授、教育支援センター付

◆モデル授業
関根嘉香 理学部化学科教授

◆集い力・挑み力・成し遂げ力を学ぶ
園田由紀子 チャレンジセンター講師

◆グループ懇談会

◆参加者による模擬授業

ＦＤに関して

今の大学生のメンタルヘルス

参加者による模擬授業

集い力・挑み力・成し遂げ力を学ぶ

モデル授業

4年間の一貫教育をお願いしています。学部は専門の集まりであるため、文理融合、教養教育、異文化理解にはほとんど関心を示しません。特に本学の場合は、教養教育、理系の基礎教育、語学、体育を各学部で担当していないため、誰が何をどのようにやっているのかを知らないということがあります。しかしそれでは駄目で、例えば、外国語教育センターが英語教育をどのようにやってどんな成果をあげているか、学部学科とどう繋げるのかを理解していただくということが必要だとお願いしています。4年間を通して一般教養、語学、体育を含めた人材育成を専門教育とあわせて考えていただくような組織的教育に取り組んでいただきたいと思っているところであります。 学士課程教育にしっかり取り組みをしていただきたい。

学生の満足度の向上を

学生の満足度を上げるということは大変重要です。特に私立大学では学生が満足しない大学は生き残っていけないと思います。ご存知のとおり、日本の4年制大学のうちの4割で定員充足ができていない状況です。これを改善するためには、学生の満足度を上げること、学生・保護者・社会の期待に応えることが必要になります。そのために私が具体的にお願いしているのは、退学者数を減らすことです。本学は毎年800人程度が退学（除籍も含む）しています。4、5年前から退学除籍者を減らしてほしいとお願いし、一時は減りましたが、昨年あたりからまた増えてきました。もちろん経済状況を反映しているとは思いますが、よくみると必ずしもそうではなく、大学教育に満足していないという理由が圧倒的に多いことが分かります。退学したいなら仕方がないというのは20年位前の大学でありまして、今は、入学させた学生にきちっとした教育をして満足できる4年間を過ごさせ、そして社会に送り出してほしいということをお願いします。

「研究の峰」作り

最後に研究のことを申し上げます。いつも教育のことばかり申し上げていますが、大学ですから研究をやらなければならないのは当たり前のことであります。ご承知のとおり、日本は高等教育に対する公財政支出の少ない国、GDP比0.5%です。これは先進国の中で最低で国が高等教育にお金を出すことが極めて貧困な国であります。そのため私立大学や保護者の皆様が苦労をするということになっているわけです。本学では全体予算のうち公的資金は1割程度です。ですから、基本的には外部資金の獲得をお願いしたいと思います。それから、本学にはたくさんの研究者がおられますが、皆さんがバラバラにやっていたのでは、研究成果を発信するのが難しいということですので、何人かの先生にお集まりいただいて「研究の峰」というものをいくつか作っていきたいと考えているところであります。これからは、大学として取り組み、社会に研究を発信し、貢献することが必要となります。国内ばかりでなく世界に研究を発信し、そして東海大学の存在感を示したいと考えています。是非、皆さんにも「研究の峰」を作っていただくようご協力をお願いします。

後輩に勧めたい大学とは

教育支援センター所長　内田晴久

教育支援センター
内田晴久 所長

1991年の大学設置基準の大綱化以降、4年制大学は800校近くまで増加してきました。特に私立大学にとっては、建学の理念を具現化する質の高い教育をいかに展開するかが大きな課題となっています。とりわけ、入学定員がおよそ5000名を超える大規模大学にとっては、日本全体の大学進学率が50%を超えたといえども、学生確保は経営的にも最大の関心事項のひとつです。本学においても魅力ある大学として、その魅力をいかに受験生やその保護者にアピールできるかが重要となっています。

一方、大学にとっては建学の理念を基に社会に貢献する人材を確実に送り出していくことが最大の責務であり、そこに向けた教育と研究や事務・財務管理といった様々な活動を確実なものとしていくことが社会に対しての強いアピールにもつながっていきます。そして大学の発展を具体的に実現していくためのひとつの方策として、学生の満足度の向上があるのだと思います。

学生にとっての満足度とは、卒業後、「ああ、この大学を卒業してよかった」と心から思えることであると思います。何をもってよかったと思えるのか、それは、実力をつけることができたから、親友ができたから、人生の目指す方向を見つけることができたから等々、色々なものがあると思います。大切なことは、学生一人ひとりの満足感が、次の時代を担っていく若者にとっての「生きがい」と「やる気」につながっていくものでなければなりません。そういった取り組みを実現できることで、学生はきっと後輩に自分の大学を勧めたくなるのではないでしょうか。自分がお世話になったと思える大学でもあり、卒業してからも継続して支援していきたいと思えるような大学、そういった大学を目指す取り組みとして教育研究活動を具体的に展開していくことがこれからのポイントであろうと思われます。

学生の満足度向上のための視点

2012年度第1回教育支援センターFD研修会より

教育支援センターでは、2012年6月26日に2012年度第1回教育支援センターFD研修会を湘南校舎にて開催しました（TV会議システムで全校舎に配信）。今回の研修会では、株式会社ベネッセコーポレーション大学事業部の影山裕介氏を講師に迎え、「学生の満足度向上のための視点」と題して、全国の大学生10万人のアセスメントデータをもとに講演をしていただきました。『COMMUNICATION NEWS UP』では、学生の満足度向上に関するヒントを得て、学部学科等での議論のきっかけとなるよう、講演の一部をまとめました。

影山裕介 氏

今回、紹介しきれない**他大学の具体的な事例**や**豊富なデータ**については、以下に示すFD研修会配布資料でご確認ください。またDVDの貸し出しも可能ですので、是非ご利用ください。

FD研修会配布資料 （学内のみ）	教育支援センターホームページ URL：http://www.esc.u-tokai.ac.jp/

DVDの貸し出し （学内のみ）	教育支援センター教育支援課 E-mail：shien@tsc.u-tokai.ac.jp

大学の教育力向上のためのステップ

STEP1：入学をして最初に、いかに大学の教育に学生を巻き込んでいくか。

大学進学の動機そのものが曖昧、希薄化している傾向にあるため、入学生は、**どのような準備を整えてきたのか、期待はどこにあるのか、スキルはどうなのか**をきちんと把握した上で、どのように大学の教育に巻き込んでいくのかを考えることは欠かせないステップです。

STEP2：学生に成長感を与える。

「満足度の向上」は、教育という視点から言い換えると、「学生を成長させる」ということです。学生に成長感を与えていくことがその後の満足度に繋がっていきます。どのように学部学科のカリキュラム、授業、環境、体制を改善することで学生の成長を捉えることができるかを検討することが必要です。

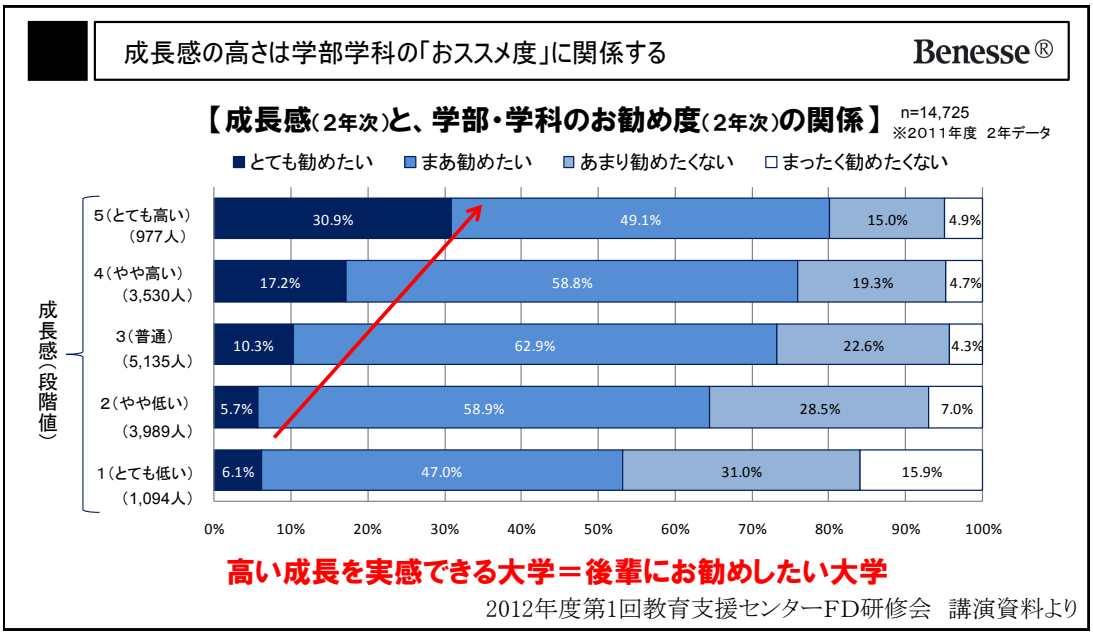
STEP3：教育目標を達成し、社会に求められる人材として送り出す。

就職活動における様々な体験を含めて、学生が自信を持って社会に出て行くことができるようにサポートすることも大切なステップとなります。

この3つのステップが成り立っていけば、学生が成長を実感し、おのずと卒業時の満足度も高まっていきます。

後輩に勧めたい大学

右のグラフから、成長感の高い学生は、自分の所属する学部学科を後輩に勧めたいと思っていることが分かります。つまり、**東海大学に入学して、自分が成長したという実感を持つことができれば、自分の所属する学部学科を後輩に勧めたいと思ってもらえる**ということなのです。学生の成長感を高めるためのポイントは、**「質：汎用的能力、スキル向上に取り組んだ自覚」「量：経験の幅広さ」**です。質と量を高める機会を大学がどう与えていくのかが、学生の成長感に影響を及ぼしています。学部横断型、課題解決型、初年次から社会をみせる等のプログラムを用意し、各授業でグループワーク、発表、文章を書く等に取り組ませることも1つの方法です。また、対人面の不安を抱えている場合は、なかなか行動ができず量を積み上げることが難しいため、学生の状況を捉えながらプログラムを検討する必要があります。



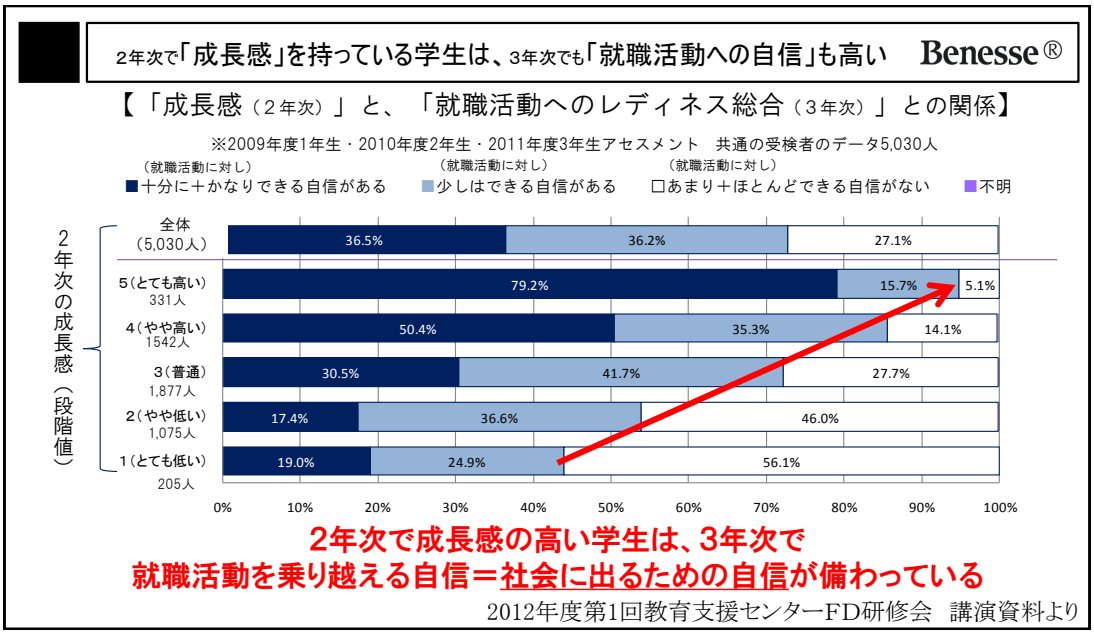
活動の「量」を増やすために大学は…

友人を含めた居場所づくりを進める。
ワークや発表等の機会を提供する。
考えや学びの「やり方」を示す。

更に… ⇩

社会との接点、教員との交流。
大学の学びと社会とのつながりを示す。

成長感は就職活動への自信にも影響する



左のグラフは、「2年次での成長感」と「3年次から始まる就職活動への自信」の関係を表しています。成長感の高い学生と低い学生では、就職活動への自信に明らかな差が出ていることが分かります。成長感の高い学生は、就職活動を乗り越える自信、すなわち社会へ出るための自信が備わっているということです。

取り組みの精度を高めるためには

東海大学では、入学前教育、新入生研修会、リメディアル教育、初年次教育、入門ゼミ、FD活動等、既に色々な取り組みをしています。あとは各取り組みの精度をいかに高めるかです。学生はこれまでも変化してきましたが、これからも変化し続けるため、データをもとに学生の実態を捉えることが重要です。現在の取り組みで、成長感を構成する汎用的能力やスキル、コミュニケーション力等をどれだけ与えていけるのかを可視化し、教員間で共有することで、各取り組みの精度を高めていくことができます。可視化や共有化は、これからの質保証や教育制度改革には必要なプロセスです。

質疑応答から

質問(教員):満足度は成長の実感に置き換えて評価されていると思うのですが、それ以外に、面倒見の良さや満足度に繋がるような調査結果がありましたら教えてください。

回答(影山氏):2年程前に「社会人基礎力を伸ばした学生、伸ばさなかった学生」という切り口で集計したことがありましたが、教員との交流に力を入れた学生は、それなりに社会的なスキルが伸びているという集計結果がでました。ゼミの活動等で大人とコミュニケーションをとること(例えば、先生から無理難題を言われたことに関して粘り強く答えていく等)は、やはり学生の成長に繋がると思います。

また、面倒見の良さという捉え方は色々とあると思うのですが、ずっと先生が一緒にいてなんでも聞いてということではなく、学生にとって都合のよい面倒見の良さ(学生が何かあったときにきちんと面倒を見てくれる人が誰なのかがはっきりしている)がうまく機能していることは、満足度に繋がっていくと思います。

質問(教員):学生が成長感を持っていない場合は、「成長しているんだよ」と言って、こちらから成長感を強引に持たせるということは効果的でしょうか。

ＦＤ研修会の様子

回答(影山氏):学生に「君は成長しているんだよ」と言ってあげることはとてもよいと思います。最近の学生は自信がありません。自分が成長したという実感がないため、きちんと君は成長していると伝えることは非常に素晴らしいと思います。ただ、漠然と「君、成長しているね」と言ってもなかなか学生自身が腑に落ちないので、「ちょっとコミュニケーション力があがってきたね」「レポートを読んでいたら、すごく文章がよくなってきたよ」というように、具体的な一言があると、学生が成長を実感するサイクルになると思います。

教育支援センターFD研修会　今後のラインアップ！

2012年度第2回 教育支援センター ＦＤ研修会

皆さん方は「学生参画」という言葉から何を連想されるでしょうか？きっと「アクティブ・ラーニング」、「ピア・サポーター」、「学生FDスタッフ」などの言葉が思い浮かぶことと思います。「アクティブ・ラーニング」はもちろん「学生参画型授業」と呼ばれるとおり、「学生参画」の一形態であることは間違いありませんが、本講演ではすでにたくさんの実践報告が出ている「アクティブ・ラーニング」は置いておき、日本の大学に急速に浸透し始めた「ピア・サポーター」と「学生FDスタッフ」に焦点を当ててお話ししてみたいと思います。サービスの受益者や教育・厚生補導の対象としてではなく、ラーニング・コミュニティの一員としての学生のあり方について考えてみたいと思います。

日時:2012年11月28日(水)17:15～19:00
講師:沖　裕貴 教授　(立命館大学　教育開発推進機構　教育開発支援センター長)
演題:学生参画ーFDの次のステップー
会場:湘南校舎　15号館4階　第1会議室

【TV会議受信場所】以下の校舎には、TV会議システムで配信いたします。

代々木	:4号館1階	4103教室	高輪	:1号館2階	1-2会議室	沼津	:1号館2階	1-205会議室
清水	:8号館4階	8401TV会議室	伊勢原	:3号館1階	会議室A	熊本	:本館5階	0501教室
阿蘇	:3号館1階	会議室3	札幌	:メッセ12階	M1212会議室	旭川	:1号館2階	会議室

2012年度第3回 教育支援センター ＦＤ研修会

社会に出ていない東海大の学生の方々に「グローバル化」を実感してもらうネタにしていただければと思い、お話しをさせていただくことになりました。「グローバル人材」と聞くと、語学に堪能で、自らの意思で新たな分野を切り開き、世界各国で活躍する優れた日本人を想像します。残念ながら、私にはそのような資質と才能はありません。しかし、グローバル企業に15年在籍して、グローバル化のインパクトを実体験しています。高等教育を受けた日本を含む先進国の若者は、いかなる企業に就職してもグローバル化のインパクトを必ず受けるはずです。一社会人としての私の経験が、教職員の方々に「グローバル化」に対応した人材イメージを掴む一助になれば幸いです。

日時:2012年12月4日(火)17:00～18:30
講師:増渕　賢一郎 氏(アドビシステムズ株式会社　マーケティング本部教育市場部　担当部長)
演題:グローバル社会が求めるクリエイティビティ
会場:湘南校舎　15号館4階　第1会議室

【TV会議受信場所】以下の校舎には、TV会議システムで配信いたします。

代々木	:4号館1階	4103教室	高輪	:1号館2階	1-2会議室	沼津	:1号館2階	1-205会議室
清水	:8号館4階	8401TV会議室	伊勢原	:3号館1階	会議室A	熊本	:本館5階	0501教室
阿蘇	:1号館2階	1213教室	札幌	:メッセ12階	M1212会議室	旭川	:1号館2階	会議室

FD、SD、教職協働 について情報をお寄せください。(校舎、学部、職場単位で取り組んでいる活動等)
教育支援センター教育支援課　Tel:0463(58)1211(代)　E-mail:shien@tsc.u-tokai.ac.jp